

# 講読の授業を単なる文法訳読の授業にしないための工夫

2009年11月7日@T A D E S K A 岡本淳子

使用論文:江澤照美(2000)「講読」から「読解」へ—スペイン語の授業改善の試み

## 1. 論文の要約

昨今、会話中心の語学授業の需要供給が増加している。しかし、知識・教養の習得のためには読解力を養う訓練が必要。

### 1. 問題点

#### 1-1. テキスト選択

- 1、2年、日本で出版された教材で間に合う。
- 3、4年、国内出版分では選択の幅が狭い。

↓

—スペイン語圏で発行されたテキスト

—新聞・雑誌のコピー → 問題点 1) 時事的テーマはすぐに時代遅れになり、繰り返し使用することが困難。

2) 基本的語彙をカバーできるとは限らない。

#### 1-2. 授業の進め方

文法訳読法に対する批判的意見は多い。

北村(1981): 一語一語の訳は避け、文章全体の意味を日本語で説明する方法が望ましい。

乾(1989): 日本語に訳す必要はない。

対照的に田中(1988)は、短時間に読解力をつけるには文法訳読法がすぐれていると述べている。

その他の教授法としては:

近松(1995): スペイン語→英訳→和訳

慶応湘南藤沢キャンパス: 学生がグループで先生役となり、OHP、ビデオ、演技、動作などを使って、他の学生にストーリーを伝える。

\* 文法訳読法の欠点 = 読書量をこなせない。

解決策: 問答法(教師が媒介語や学習言語で文章の内容を質問し、理解度をはかる)

↓

学生の読み方が雑になっていないかを確認するために、適切な質問をする必要がある。

\* 訳文ノートの欠点 = ノートを作っただけで安心してしまう。ノートを読んで答えることはできるが、その場で逐語訳ができない学生もいる。

→ 未知の表現や語彙の意味を推測する訓練をし、想像力を養わせることが必要。

### 1-3. 評価の方法

#### 1) 試験範囲の中から適当な文章を和訳させる試験

問題点：① 訳文ノートの日本語文を丸暗記する学生がいる。

② 学生が書く答の訳がバラエティに富み、一定の基準で採点し続けることが困難。

解決策として、

#### 2) 英語の長文読解形式を模した試験（単語の意味、構文の構造、数字や記号の読み方なども尋ねる）

課題：学習者の読解力をはかるのに適切な問題をどれだけ作れるか。

訳文を要求する試験：問題作成は楽。採点に時間がかかる。

長文読解形式の試験：問題作成に時間がかかる。採点は比較的短時間で終わる。

教師が要する時間は同じか・・・

## 2. 「読解」の授業の試み

学生が速読で多量の文章を読み、問答法で内容確認をする授業を「読解」と呼ぶ。

### 2-1. 「研究講読B」(3・4年生対象)のテキスト選択

教材の提案：①スペインで発行された外国人向け教材

②若い世代に人気のある漫画のスペイン語版

③スペイン語の新聞（省略が多く、現地人の一般常識が下敷きになっているため、理解が困難なことが多い）

実際に採用：日本の事柄についてスペイン語で書かれたもの(例：「かぐや姫」、日本料理のレシピ)

### 2-2. 西辞典の使用と語彙力について

「講読」は予習が不可欠

「読解」は初めて目にする文章を時間制限付きで読む。

「読解」授業の工夫：①予習しない習慣を防ぐため、毎回課題プリントを配布し、次回にミニテスト。

②授業中に西辞典を使用することを義務付けた。

→ 学習者の語彙力不足のため、読解以前の問題が発生 → 教材見直し  
高橋(1987)の結論：語彙力が不足している場合、「読解」の授業の効果は上がりにくい。

### 2-3. その他

#### 1) 試験：本来なら西辞典のみ持込で初出の文章を読解させるべき

問題点：日ごろの授業で手を抜く学生が出てくる。

解決策：すでに読んだプリントも試験範囲とし、授業中とは異なる設問をした。

#### 2) 「読解」と「聞く」「話す」「書く」を関連させる。

①問答はスペイン語や日本語で行なう。

②ミニテストは問いも答もスペイン語。

### 3. 今後の展望

「講読」 特長：入念な訳読によるスペイン語理解。スペイン語圏の文化についての知識が得られる。  
短所：多読に不向き

「読解」 特長：速読で文章全体の内容把握に重点が置かれ、単語の類推能力を養う。  
短所：雑な読み方になる危険

\*両方の訓練が外国語上達のために必要。

## II. 現状と今後の試み

現在、発表者自身が担当している二つの授業を、江澤さんの論文と関係付けながら紹介していく。

### 1. 文化講読（A大学スペイン語専攻1年生対象）

ー使用テキスト：『スペインを知るために』（西川喬、セフェリーノ・プエブラ著、第三書房）  
大学側から指定。

ー学生数：19名

ー授業形態：基本的に(文法)訳読法

- 1) 1人の学生が2～3文をスペイン語で読んでから和訳する。間違っている箇所、怪しい箇所は教師から質問する。
- 2) 基本的に文法は説明しない。どれだけ辞書を丁寧に引けるかを重視している。文法について学生から質問があれば、板書して説明する場合もある。
- 3) 説明が必要な単語、歴史的背景、文化的背景などは適宜説明。
- 4) 講読しているテーマについて、日本との比較において意見を求める。
- 5) 一課が終わると、CDを聞かせる。

コメント：

- 1) スペイン語を始めたばかりの1年生が対象なので、丁寧に読んでいく必要があると思う。雰囲気で作る学生を放置することは、スペイン語力の向上を妨げることになると思う。
- 2) 一文一文の意味ではなく、文脈を考慮しながら読むことが重要である。そのためには、辞書に載っているたくさんの意味のうち、どれがその文脈において適切なのかを考えるように指導していくことが大切。また、前後関係に留意するように、目的格人称代名詞について質問すべき。

問題点：

- 1) 教師が主導権を握った授業になってしまう。教師が質問し、学生が答えるという単調なパターンになりがち。
- 2) 江澤さんが言うように、「聞く」「話す」などの活動とも関連づけられたら良いと思うが、まだ1年生であるために難しい。

- 3) 試験は、和訳を中心にしているが、江澤さんの指摘通りの問題が浮上する。日本語を覚えてくる学習者への対策としては、目的格人称代名詞が何を指しているのかを尋ねたり、( ) に単語を入れる問題も作っている。また、採点基準の問題は毎回悩むところではあるが、全員の解答を一気に採点し、採点にブレがない様に努めるにとどまっている。

今度の試み：

教師から学生への一方通行にしないため、訳した学生自身が司会者になり、質問を受け、それに答えるというのを 11 月 11 日からやってみる予定。

## 2. スペイン文学特殊研究 (A 大学スペイン語専攻 3 ~ 4 年対象)

—使用テキスト：Antonio Buero Vallejo, *La doble historia del doctor Valmy* 教師が選択

—学生数：10 名

—授業形態：基本的に(文法)訳読法

- 1) 戯曲特有の訳については、初回の授業で説明。また、舞台装置についてもイラストを描いてプリントを配布。
- 2) 作品の時代背景について、学生に質問しながら確認していく。(内戦、独裁制、検閲についてなど)
- 3) 一人の学生が 10 行くらいスペイン語を読み、日本語に訳す。間違っている箇所、怪しい箇所はつっこんで質問するが、あまり細かい部分にはこだわらない。
- 4) 基本的に文法は説明しない。学生から質問があれば説明する。しかし、目的格人称代名詞が何を指しているのかは必ず質問する。
- 5) 人間関係を考えながら読むように指導。あくまでも文学作品を読んでいることを意識させ、直訳や会話文らしからぬ訳は注意する。
- 6) 試験はしない。前期は、何回か提出させた和訳と、前期で読んだ部分の要約とを総合して評価。

問題点：

- 1) 一文一文訳しているため、作品を読み終えることができない。
- 2) 提出させた和訳の採点が不公平にならないように、かなり気を使うし、時間もかかる。

今後の試み：

前期はオーソドックスな講読の授業 +  $\alpha$  であったが、11 月 11 日からは授業のやり方を変更することにした。1 回の授業の範囲 (講読の時には約 3 ページ) を 5 ~ 6 ページとし、担当者二人があらすじと論点をまとめてレジュメを用意する。全員で議論する。これで進めていくと作品を読み終えることができる。最終課題はミニ論文を書いてもらうつもりである。

結論：

最初は文法訳読法で講読の授業をするのが良いのではないかと思う。文の構造を文法的に正しく理解できないうちから、適当 (アバウト) に内容把握をすることを覚えてしまうと、最終的には読解力を高めることはできないのではないだろうか。

江澤さんの提案する「読解」の授業も必要であることは間違いない。ただ、「講読」で基礎をしっかりと固めた上で、速読・多読の訓練をするのが望ましいのではないかと思う。「講読」と「読解」の授業が二本立てであればそれに越したことはない。ただ、そのようなカリキュラムに恵まれた大学は少ないであろうから、前期に「講読」で丁寧に読む訓練をし、後期には速読で内容把握に努める「読解」をするというような工夫も可能であろう。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

発表後の意見交換では次のような紹介があった。

- \* M先生は、言語講読の授業で範囲を決めて三名の学生が発表する形式で授業を行なったことがある。他の学生はプリントに発表者の成績とコメント（良かった点、悪かった点、アドバイスなど）を書いて提出。鋭いコメントを書く学生もいて、充実した授業になった。
- \* また、M先生は試験に論述問題を出したこともあるが、これは筋の通ったことを書いていけば点をあげるという学生に点数を取らせるための問題。発表者もテキストの内容について尋ねる問題を出す。ポイントがずれていなければどんな答でも点数をあげるという点では、M先生と同じである。
- \* O先生は、学生にまず動詞を見つけさせ、その動詞の主語あるいは目的語を探させる。従属節を持つ文章の場合は、que、そして主動詞を探させるなどの工夫をしている。文法的に読むことと常識的に読むことを並行して行なうと、読解力が高まる。